総決起

全国の仲間と手を組もう　安保改定阻止に立上ろう

もう失業はごめんだ　崩すな統一と団結

交流オルグ20名東京へ出発（大牟田駅で）

一日仂いてやつとその日を支える（夕食の買物をする自労の婦人）

安保改定阻止のため百万人署名が行われている（拠点大会場で）

主婦達の固いスクラムが明るい歴史を築いている（八日の大集会で）

みんな立上ろう

安保改定反対で文学者は発言する

安保条約改定を軸として各産業に企業合理化が強行され、失業者は巷にハンランしている。いま総評をはじめ全労働者がこの反対闘争に立上つているが、民主団体・文化人・学者も強硬な反対運動に立上つた。こうしていまや一大国民運動にまで発展しつつあるが、安保改定・首切り・失業に反対するこれらの人たちの発言をこの号で集録してみた。

独立と自由

作家　大江健三郎

安保改定の動きをめぐつて、もつとも気になるのは条約期限を十年にするということだ。十年の条約期限ということは、特定の国との従属関係を十年間の長期にわたつて結ぶということである。小説を書いているぼくにとつて必要なことは、だれにも従属せずに独立し自由であることだと考えているだけに条約によつてアメリカに十年間従属しなければならないことは耐えがたいことだ。従属は、ぼくをふくめた日本の青年の自由を、十年間にわたつて奪つてしまうということでもある。

特定の国に長期にわたつて支配されるとき、被支配国の芸術はすたれてしまうものであるということを、先頭ぼくは沖縄でみてきた。沖縄はいまなおアメリカの支配下におかれており、住民の話すことばは相当以上に混乱をきたしていた。民族のことばが失われたときその民族の芸術はだめになつてしまうことをも、沖縄の現実から痛感されたのである。国と国とが政治的関係を結ぶことは、必然的にその従属する側の国の文化的側面まで拘束するし、その結果日本語は変えられてしまい違つたものになつてくる。そうなると日本の芸術はどうなるだろう。

それに十年といつても、いままでの十年の年月のきざみと、これからの十年のきざみとは大きく違つてくるだろうとおもう。それにも安保改定の問題について、国民の中にまだわからぬという声があるそしてわからせようとすることは難しいという声もある。だがわからないでいることは、よくないとおもう。政府は秘密のうちに、ことを運ぼうとしているのだから、国民はよけいにわからなければならない。国民には国の政治についてわかる権利と、わからねばならない義務がある。わからないから政府にまかせようというのは、国民の義務も権利も放棄したと同じことである。

ある人びとは、反対を表明したり演説したりしても、それは道徳的発言にすぎず実力を発揮することはできないという。なるほど、わたしたちはコン棒はもつていないしかしわたしたちの発言は、人をたくさん殺すことには金をつかうが、堤防をつくる金はつかわないという状態を、道徳にかなうものにしてゆこうとする人びとの意思を結集することには役立つ。日本の文学者はこの前の戦争で大きなミスをやつた。それは道徳的発言をしなかつたからであり、こんどはいえるうちにどんどんいつて、未然に戦争にまきこまれることをふせぐことが必要だ。

こんどの改定案で、日米が対等の関係になることだと政府はいつている。しかし、軍隊をもたない国と原水爆をもつている国とが対等になることがありえようか。ピストルをもつているものと出刃包丁をもつているものとがいて、ピストルをもつているものから、「あそこへどろぼうにいこうじやないか」と軍前協議されて、実際問題として拒否権が発動できるだろうか。ピストルの銃口がつきつけられているという状態で、それは不可能だろう。〝極東の平和〟のために必要なのだといわれるが、台湾から第七艦隊がひきあげれば、それだけでも極東は平和になるだろうとおもう。（なかのしげはる氏は作家。10月15日新日本文学会の安保改定反対の夕講演会から）

再び眠るな

作家　中野重治

かかわらず、われわれが十年間同じカラをかぶつていなければならないとするならば、当然のことながら日本の文化は萎縮し退歩するだろう。そして日本人の精神的、肉体的なものの中にひそんでいるいきいきとした感情は失われてしまうことになる。独立性をなくし自由を奪われたとき、われわれは天皇のように背の丸まつたしぼんだ人間になつてしまうのではないだろうか。（おおえ・けんざぶろう氏は作家、十月十五日新日本文学会の安保改定反対の夕講演会から）

徴兵への道標

作家　開高健

定保条約改定の問題は、昨年の警職法とはちがつてわれわれの生活にはなにか縁どおい感じがしないでもない。しかし砂川とかそのほか全国各地の基地闘争で日本人が血を流さねばならなかつた原因が安保条約にあるのを知るとき、決してそれは無縁なものだなどとはいえないとおもう。

安保条約改定の趣旨は、現行条約の不平等を平等に改め日米の関係を対等なものにすることにある、といわれているが、改定内容は日米間に新しい軍事同盟を締結することにあるといい替えた方がぴつたりするようだ。では改定された後日本はどうなるのだろうか、そのすべてを見通すことは困難なことだが、それによつて自衛隊の経費が増大することだけは確かだろう。現在自衛隊の経費は一千億円である。それが改定にともなう防衛計画によると三千億円にふえることになつている。先の伊勢湾台風による名古屋の被害なども、自衛隊の浪費をなくし治山治水工事に力をそそいでいたならば、被害をもつと少くすることができたかも知れない。台風のたびに国民がまるでアフリカのコンゴー流域の住民たちのような野ばんな被害を受けることに悲しみを越して憤りをおぼえる。新しい軍事同盟は、われわれ青年をやがて徴兵制度に組みしき、海外派兵を命令してくるかもしれない。それを否定することはできない状態を、安保改定の内容はふくんでいるようにもおもう。

政治のことだ〝ケ・セラ・セラ〟だと、われわれはその歌をうたいすぎたようだけれど、こんどは〝ケ・セラ・セラ〟では大変なことになることを自覚したいと思う。

（かいこう・たけし氏は作家、十月十五日新日本文学会の安保改定反対の夕講演会から）

敬弔

十一月二十日、けい肺で死去された入部藤作氏（三川）の霊に対し謹んで哀悼の意を表します

三池炭鉱労働組合
三池炭鉱主婦会

安保・合理化・失業に反対

県内大行進始まる

大牟田を24日に出発

「安保改定・合理化・失業に反対する大行進」は、福岡県では二十四日から三コースにわかれ開始することになつた。

安保改定調印の時期が切迫し、炭鉱独占の企業整備の攻撃も深刻化し、炭鉱離職者を中心とする失業者の生活も冬を迎えてたえがたいものとなつてきた。

このような情勢のなかで「安保改定」「合理化」「失業」に反対して闘つてきた労働者、民主勢力の力を一そう団結させ、さらに広く県民に呼びかけ、一切の力を結集して政策変更をせまる第八次、第九次の全国統一行動を成功させるために、大行進と県庁前座り込みがおこなわれるのである。

県内各コースは門司、大牟田、山田各市を拠点とする三コース。

大牟田地区は二十四日午前九時市役所前を出発、筑後一久留米一二日市一福岡の三泊四日。

大地評では各単組から四十名が福岡まで行進する。三鉱労組からは六名が参加、なお第一日目の予定である筑後市までのコースには九十名が参加する。

一方、熊本県は七コースに分かれて熊本市へ行進を開始するが、荒尾地区は二十五日正午出発、玉名植木、熊本の二泊三日の予定であり、出発前に地元の総決起大会をひらき、沿線主要な市町村役場および職安の関係機関と団交をおこない、沿線で反失業闘争のアピールをおこなうことになつている。三鉱労組からは五名が熊本までの行進に参加、第一日目には六十名が参加する。

県集会と交渉

大行進と呼応して対県座込みがおこなわれるが福岡県では、西中洲水上公園で二十四日から二十七日まで実施する。

これには炭労、失業者、地元自労が徹夜で座込みを行うが、昼は黒い羽根とビラまき、百万人署名運動で大宣伝活動をやることになつている。

なお、二十七日午後一時、行進団の到着をまつて県庁前広場で県集会を開き、集会ごは全自労、失業者は対県交渉を実施することになつている。

県道には各団体の歓迎も予定されているが、全コースを通じて、一人でも多く、みんながたとえ一歩でも行進に参加することを呼びかけている。

なお、行進は十一月二十七日午前十二時に福岡県庁前に到着予定であり、県集会に参加して解散する予定。

北海道でも

三行進団に分れて

北海道では十月末から「安保、合理化、失業に反対する大行進」が行なわれている。この大行進は道東の釧路、道南の函館、最北端の稚内、道東北の網走を起点として行進をおこし、十一月七日札幌で行なわれる総評主催の北海道プロツク労働者総決起大会に参加するもので、釧路、網走、稚内の三行進団は炭鉱地帯を通つて美唄で合流札幌へ向うことになつている